

下れない。右岸から捲く。下り終えて見上げると、左岸から登れるような気がした。しかしかなり微妙な感じである。

あとはもう平凡な河原歩きとなる。蛇籠でできた砂防ダムを越すと真名子川本流は間近であった。

[タイム] 下降開始(9:10)→右俣出合(9:45)→右俣終了(9:55)→左俣出合(10:00)→左俣終了(10:10)→下降終了(11:40)

真名子川支流口の沢(仮称)

1990年10月21日

10:50口の沢(仮称)源頭めざして下降開始。急斜面のやぶを下ると口の沢(仮称)源頭となる。この水源も落葉の下からしみ出る水であった。このあとすぐナメとなる。滝はどうかと期待して下ったら、出てきました30mの滝。上部はナメ状で、ブッシュをつかみながら下ったが、最後の15m程は懸垂下降ほかなかった。下りおえて振り返ってみると、左右から合流する支沢にも20mの滝がそれぞれかかっている。

20mクラスの滝が標高700m程の位置に必ず存在する。

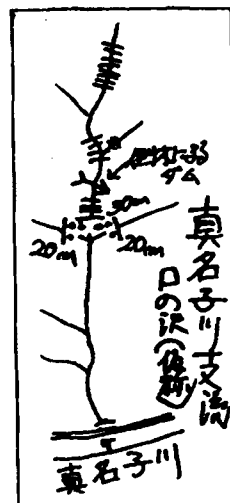
この沢も例外ではなかった。

[タイム] 下降開始(10:50)→下降終了(11:45)

真名子川支流ハの沢(仮称)右俣, 左俣

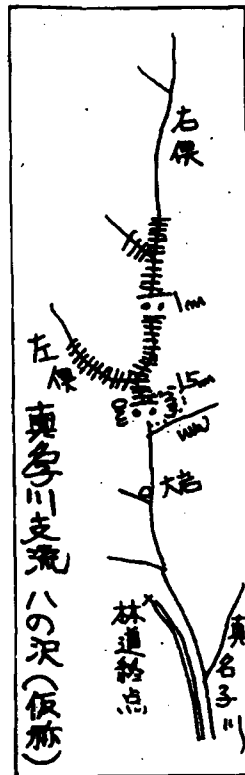
1990年9月9日

真名子川林道の終点にて仮眠。午前7時より行動開始。林道は、地図にあるより奥、ハの沢(仮称)出合の少し先まで入り込んでいた。



ハの沢(仮称)は、出だしからブッシュがかぶさる細い流れとなっている。すぐ隣の千歳川流域では、どの支沢にも必ず10~20mクラスの滝が出てくるので、真名子川もと期待したのであるが、どうも貧弱な滑り出しである。でも、15分程遡行した所で滝が出てきた。この沢にもやはり滝がある。落差は15mくらい。白っぽい岩肌のホールドのない滝。左岸から高捲く。高捲きは、樹林帯の中ではあるが急斜面の登りとトラバース、そしてまた急斜面の下りと、結構きつかった。

滝の上はずっとナメが続いている。そして右岸から左俣が合流する。左俣は本流である右俣に比べるとずっと貧弱であるが、奥までナメが続いていそう。とにかく偵察してみようとして入ってみる。沢幅は狭いが、ずっとナメが続く。10分程歩くとようやくナメは終わりとなったが、その先はもうヤブの中の湿地帯となっている。兩岸からはブッシュがかぶさって、簡単に歩けるものでもないので、遡行終了として引き返すことにする。



滝の上まで戻って本流である右俣の遡行を続ける。右俣もやはりナメが続いている。途中1mくらいの小滝をはさんでずっとナメである。10分ほど続いた。左に小沢を分けると急に沢幅が狭くなった。そしてナメも終わる。ブッシュがかかるようになった小沢をつめあげていたら、小さな湿地帯に出た。樹林に囲まれた湿地帯は、そこだけ周囲とは異なる独特の空間を作り上げている。ちょっと気をぬいてメモをとっていたら、いきなり両足とも股下までもぐりこんでしまった。大失敗。

湿地帯の上は、もう細いミゾ状の流れにすぎなくなる。湿地帯になってぬかるむ所もある。幸い、伐採地は過ぎ樹林帯の中の流れとなって、ヤブこぎの苦労はなくなった。8:05、沢はますます細いミゾと化す。もうこの辺でよかろうと、右岸から入る小さな流れを伝い、あとは若い造林地に飛び込んで、ヤブをこぎながら尾根上の林道をめざす。

(記)

[タイム] 遡行開始(7:00)→左俣出合(7:30)→左俣終了(7:40)→右俣出合(7:50)
→右俣終了(8:10)→林道(8:30)